

【論文】

不登校の子どものいる母親が エンパワメントに向かうプロセスとその支援 ー可視化されにくいジェンダーの課題に着目してー

小 倉 明 子

和文抄録

令和6年度の不登校児童生徒数は35万人を超え、その対応が喫緊の課題であることは社会の共通認識と言えようが、彼らの母親が「母親規範」というジェンダーをめぐる抑圧を受けやすいことは可視化される傾向にある。本稿では不登校の子どものいる母親が家庭や学校との関係性の中でどのような課題を抱えるのかについてインタビュー調査した結果をM-GTAを用いて分析し、いかなるプロセスを経てエンパワメントに向かうのかを明らかにした。そしてフェミニストソーシャルワークの視角から不登校の子どものいる母親支援のあり様として提示している。分析の結果図では母親には「個人としての私」、「家族の中の私」、「社会で生きる私」という異なる次元の狭間に表面化しにくいニーズが存在することを可視化するとともに、その狭間はエネルギーの源泉でもあると見出し、ジェンダーセンシティビティのある支援によって母親はエンパワメントに向かうと結論付けている。

キーワード：不登校，母親規範，ジェンダー，フェミニストソーシャルワーク，M-GTA

I. 研究の背景と問題意識

文部科学省（2025）の『令和6年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』によれば令和6年度の小・中学校における不登校の児童生徒数は353,970人にのぼる。その数は12年連続で増加しており、不登校が社会の喫緊の課題であることに疑いの余地はない。同調査は不登校の子どもの約4割は専門的

な相談支援に繋がっていないことも明らかにしているが、工藤浩二（2023）はこうした状況について、「不登校児童生徒に実質的に関わる主たる人物は、多くの場合その母親であろう」と述べている。しかしながら論文検索サイトCiNiiによると2000年以降の論文でタイトルに「不登校」という言葉を含むものは6,659件該当し、社会の問題意識の高さが伺えるものの、それに「母親」「支援」の二つのキーワードを含めて検索をすると該当は22件と全体の約0.3%と激減する。しかもそれらは心理学や教育学の分野からの報告に限られ、母親がケアの主体と規定されがちなジェンダーの課題を踏まえ、そのニーズに着眼したソーシャルワークの観点からの報告は、筆者

2025年12月22日受付／2026年5月20日受理
OGURA Akiko
立教大学コミュニティ福祉学部
E-mail: a.ogura@rikkyo.ac.jp

が確認した範囲では見当たらない（最終アクセス2026年4月7日）。

しかし、ソーシャルワークのグローバル定義はソーシャルワーク専門職の任務として、構造的・個人的障壁をなす抑圧の一つにジェンダーを挙げ、それらについての批判的意識を養い、行動戦略を立てることは人々のエンパワメントと解放を目指す実践の中核をなすと注釈をつけている¹⁾。また横山登志子（2020: 30）も「ソーシャルワーカーが支援においてジェンダーの視点を持つ必要性は『人権と社会正義』に照らして大いにある」と指摘する。

だが現実には不登校の子どものいる母親を取り巻くジェンダーの課題やそのニーズは「母親規範」の存在自体を不問とする社会の中で不可視化される傾向にある。1970年代半ばから1980年代前半の時期に「登校拒否」は家族問題、とりわけ母親を「犯人化」することで問題化され、彼女たちに向けられる眼差しを冷ややかなものへと方向づけてきた。これによって母親の人生の主体としての側面は軽視され、家族の中の「子どもを学校へ通わせる」役割期待に拍車がかかる。当時の文部省（1992）が「登校拒否（不登校）はどの子にも起こりうる」という見解を出して以降、その位置づけは子どもの主体的な選択という含意も内包するようにはなるものの、加藤美帆（2012: 200）によれば「学校を通じた社会的排除」という性質は変わらず、なおも子どものみならず母親を周縁化し続けている。

そこで本稿では不登校の子どものいる母親の可視化されにくいジェンダーをめぐる抑圧についてインタビューで聴きとり、ソーシャルワークの側面からその支援の検討を試みる。

II. 研究の視角

Lee-Judith と Hudson-Ronda によればエンパワメントの概念はその主体について多少の解釈の相違はあるものの、主に障壁を克服する言葉として用いられてきているが（＝2023: 174-5）、本稿では特に、抑圧されている者がサポートを得な

がらも主体的に解放へ向かうという主旨で用いる。とりわけ女性のエンパワメントについては天童睦子（2020: 8）が「自ら力をつけること、上からの押し付けではなく、自ら力をつけて連帯し行動することによって自分たちが置かれた状態や位置を変えていこうとすること」、森田ゆり（2000: 87）が「傷つけられ、抑圧され、外へ出すことを阻止されてきた自分の力に気がつくこと、それを活性化させること、内なる力の回復」と整理していることを参考にし、その概念を「自身の内的な力に気づき、他者と連帯することによって自分たちの置かれた生きづらいつい状況から解放されていくプロセス」と定義する。そして家庭や学校から不登校の子どものいる母親に求められる役割が、このエンパワメントを阻む「母親規範」としてジェンダーに基づく抑圧となっている可能性を研究の視角とする。

III. 研究の内容

1. 研究の目的

不登校の子どものいる母親は、家庭や学校から求められる役割をどのように受け止め、いかなるプロセスを経てエンパワメントに向かうのかを明らかにし、その支援のあり様を提示する。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

母親のエンパワメントについては障害を持つ子どもを養育する母親の支援（市川由香里：2018）、若年妊婦の支援（中原洋子：2016）、コミュニケーションに課題を抱える母親の支援（上田明美・石橋照子・吉川洋子：2022、内海由美子・澤恩嬉：2013、石崎和美・朴木佳織留：2014）等にエンパワメントの視角が見られるが、それらは母親に子どもの養育責任があることが前提で、「あるべき母親像」が想定されている傾向は否めない。Dominelli-Lena（＝2015: 220）はこうした傾向について男性と女性の経験の違いを踏まえたエンパワメント志向のフェミニストソーシャルワーク（以下 FSW）（Milliken-Eveline: 2017＝2023、横山：2024）の視点から「子ど

ものの最善の利益のために女性を管理、批判する考え方が存在することは否定できず、母親への過度なケア役割が期待されている」として警鐘を鳴らしている。また湯澤直美（2017: 27）も「子育てへの支援策が、養育の第一義的責任者としての親、とりわけ母親個人の行動や道徳を問う政策的な介入の色彩を強めていくおそれがある」と、個人としての女性を尊重する視点の欠如とその必要性を説く。さらに、横山（2024: 313）は、「ソーシャルワーク全般に女性抑圧とその解放を目指すフェミニズムの視点や、性別カテゴリーに基づく不平等に注目するジェンダーの視点が定着しているとは言い難い」と指摘しており、これらはいずれもソーシャルワーカーが構造的なジェンダー不平等を視野に据え、ジェンダーセンシティブティ（ジェンダーに敏感な視点）を培う重要性を示唆している。

他方、不登校の子どものいる母親へと焦点を合わせると文部科学省（2022）が子どもの為という視点から保護者支援の有効性を生徒指導提要で述べているほか、大久保義美・肥田幸子（2006: 76）も「母親の安定感が増す程に子どもも安定していく」ことを明らかにしている。無論、母親を子どもの重要な環境と捉えた際の母親へのサポートの重要性は言うに及ばない。とはいえその第一義的目的は子どもの成長だけではないはずで、母親にも人生の主体としての側面があり、子どもの不登校に際して自身が抱える困難とニーズがあるろう。それを踏まえて母親自身を支援の対象と捉

える必要性は加藤（2009: 103）による、母親は子どもの不登校を受容し難い父親へのサポートも期待されるという「ジェンダー化した不平等な関係性」があるという指摘や、水谷千景（2024: 21）による「不登校の母親の問題とはジェンダー不平等を背景とする女性の問題」という当事者研究としての説得力のある指摘からも裏付けられる。さらに沖津奈緒（2020: 95 他）は不登校の子どものいる母親の成長には「似た境遇にある他者との交流」があると立証しており、その支援の方向性が示唆されている。

本稿ではこれらの指摘を視野に入れ、FSW の視角からリサーチクエスション（以下 RQ）を、以下のように設定する。①母親は家庭や学校との関係性の中で求められる役割を、女性としてのジェンダー意識と照らし合わせてどのように受け止めているのか、②母親は子どもの不登校という経験を経て、どのようなプロセスを辿りながらエンパワメントに向かうのか、の2点と定め、不登校の子どものいる母親自身を人生の主体と捉えた具体的な支援のあり様を探っていく。

3. 調査の対象者と依頼方法

不登校の子どものいる母親の様相を偏りなく聴きとるために、3つの異なるタイプの不登校支援団体から対象者を募り、インタビュー調査を実施した。ご協力頂けたのは全員配偶者のいる母親で、その概要は表1の通りである。

表1 インタビュー対象

No	呼称	所属団体	年齢	子どもが不登校の期間
1	A	親の会	50代	長男10年間
2	B	親の会	50代	長女1年間 長男5年間
3	C	親の会	40代	長男1年半
4	D	フリースクール	40代	長男6年間
5	E	フリースクール	30代	長男3年半 次男1年半
6	F	フリースクール	40代	長女5年間
7	G	オルタナティヴスクール	40代	次男3年間
8	H	オルタナティヴスクール	40代	長男5年半 長女2年半
9	I	オルタナティヴスクール	40代	長男2年半

4. 調査の内容と倫理的配慮

インタビュー実施期間は2024年6月～2024年8月で、インタビュー時間は平均78分、逐語記録はA4用紙にして173枚であった。質問項目は①子どもが学校へ行かなくなった頃の気持ち、②「母親だから頑張らなければ」と飲みこんできた感情、③変化の兆しとなった出来事とそれによってついた力、④子どもの不登校に伴う家族や自身の生き方の変化などを中心に、半構造化インタビューを行った。調査の行程については立教大学コミュニティ福祉学部倫理委員会の承認を得ており、日本ソーシャルワーク学会の研究倫理指針に沿って実施している。

5. 分析方法

収集したデータの分析には、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（以下、M-GTA）を用いた。同手法は人間行動の説明モデルとして実践のアセスメントに活かしやすいことに加え、能動的人間観に基づいたエンパワメントの視点を有している（木下：2020）。これらの特徴はスクールソーシャルワーカーとして筆者自身がジェンダー平等を念頭に置き、母親たちの言語化しにくいニーズを汲み取ろうと取り組んできた実践知と深く連関するため、分析に用いた。分析に先立ち2023年度にM-GTA提唱者である木下康仁氏の講義を1年間にわたり受講し、手法の習熟に努めた。

具体的な分析は木下の定めた手順に則って、①一人目の対象者のデータを読み込み、分析テーマに即して重要と判断される部分を分析ワークシートの『バリエーション』欄に記入、その意味合いを解釈、定義し概念として定める、②その際の気づきを理論的メモ欄に記し、対極例、類似例があれば新たな分析ワークシートを立ちあげる、③二人目以降のデータについては、新たな観点があればさらに新規のワークシートを立ち上げる、という継続的比較分析を行い、それらをカテゴリー化した関係性を結果図とストーリーラインで表した。

尚、分析テーマは「不登校の子どものいる母親が自分の意識を解放するプロセス」、分析焦点者を「不登校の子どものいる（あるいはかつて育てていた）母親」と定めた。

IV. 研究結果

27の概念を生成し、それらを7つのサブカテゴリーを内包する4つのカテゴリーとして捉え、そのうち【人生の主体への回帰】をコアカテゴリーと位置づけた。概念の詳細については表2を参照されたい。尚、ストーリーラインではカテゴリーを【 】, サブカテゴリーを《 》, 概念を下線で表している。データの発言者は（ ）付きのアルファベットで表記する。

表2 不登校の子どものいる母親が自分の意識を解放するプロセスを説明する概念一覧

コア カテゴリー	サブ カテゴリー	概念	定義	バリエーション数
人生の 主体への 回帰	／	時間を味方に	時間の経過とともに社会や人も変化することに加え、自分も次第に肝が座って生きやすくなっていくこと	19
	他者の基準に 照らして生きる	母のようにと羨られ	性別役割分業や夫への気遣いを要する社会構造や、自らにも内在するジェンダー規範に生きづらさを感じる	35
		こうあるべき	自分にも他者にも自らの価値観や規範を強いて「こうあるべき」という姿を求めること	23
		気持ちを飲み込む	伝えたい事があっても、他者の立場や気持ちを優先して表現を控えたり、言っても伝わらないとあきらめること	21
	／	自分自身の声を聴く	他者の価値感に翻弄されずに、人生の主体として「自分がどうしたいのか」を意識して行動できるようになること	32

不登校の子どものいる母親がエンパワメントに向かうプロセスとその支援

	自分の意識を 描き換える	後悔と共存	自分の行動が子どもに悪影響があったという後悔があるが、それに蓋をせずにその後の生き方に活かしていくこと	18
		家族の共鳴を信じる	不登校を通して生ずる家族内の様々な相互作用や変化を信頼できること	29
		言ってもいいんだ	発言をためらう習慣を克服し、思いを他者に伝えて達成感を得ること	14
カテゴリー	サブ カテゴリー	／	／	／
弱者となつて社会と出会う	／	まさかわが子が	子どもが学校を休むという社会の常識に外れる状態に慌て、子どもをコントロールできない状態に愕然とすること	
	調整弁としての 摩耗	周囲からの風当たり	社会通念上の規範による風当たりを受けること	13
		追い詰められて憔悴	子育てや自分の判断、生き方に自信を失い、不安に苛まれ困惑し、追い詰められること	20
		伴走者不在の孤独	パートナーと共有できない経験や感覚のズレを感じながら母親、女性ならではの思いをみつめること	19
	／	学校に声が届かない	教員の不登校に関する認識や問題の本質を共有できない事に落胆、期待に一区切りをつけて自ら動き出すこと	25
	問題意識の萌芽	大丈夫って言って	自分の子育てや生き方が不安で、話を聞いてくれる人や承認してくれる人を探し求めること	40
		負うた子に教えられ	子どもの態度や言葉に励まされ、自分が居ずまいを正して、動き始めること	15
		学びはモーター	教育の在り方や子どもの成長に関する学びを深め、新たな考え方や姿勢を吸収し、行動に変化が起き始めること	18
自分の課題に 気づく	／	取り繕いを手放す	社会の規範や家族の要望に沿おうとしてきた取り繕いを手放そうとすること	14
	親子関係の 再定義	親を乗り越える	親世代の価値観の囚われから距離を置くとともに、自分自身も親としてのあるべき形を手放していくこと	16
		へその緒の奢り	自分が産んだという自負と責任感が強く、子どもを個人として切り離して考えにくいこと	16
他者と呼応し自らも慈しむ	／	境界の意識化	子どもを尊重するとともに、自分と他者の間の境界や自分の限界を意識できるようになること	17
	新たな関係性に 息づく	受容されて持続可能	無条件に受容される安心感を得て、大変な状況の中でもかろうじて自分自身を保つこと	23
		健やかなる時も病める時も	不登校や子どもに対しての思いが夫と共有でき、人生のパートナーとして足並みがそろふこと	13
		仲間との連帯	自らの姿勢を明らかにして新たにネットワークを広げ、体験を共有して力をつけていくこと	17
	／	幸せの形を模索	自分の幸せの在り方を模索すること	22
	回復途上の自尊心	経験値の活性化	本来の持ち味や得意なことに人生の経験値が加わった力を総動員して活かすこと	12
		反復する「やっぱり」	明らかな脱皮ではなく薄皮をはぐように、行きつ戻りつしながら自分の判断や生き方を定めていくこと	8
		仕事では紅をひく	家庭の諸々をわきに置き仕事で社会との接点を維持し、評価と収入を得て自分を立て直していくこと	14

(筆者作成)

1. ストーリーライン

不登校の子どものいる母親が自分の意識を解放するプロセスは、規範が重んじられる社会の中で母のようにと躰けられ、こうあるべきと気持ちを飲み込むなど《他者の基準に照らして生きる》ことが常態化していた母親が、時間を味方にし、自分自身の声を聴くことに正直になる事で新たな局面が拓ける。家族の共鳴を信じることは時に後悔と共存する痛みを伴うが、子どもの不登校に伴う経験を活かそうと言ってもいいんだと発言する事へのためらいを払拭し、自らに誇りを持つことで、母親は《自分の意識を描き換える》段階に至り、【人生の主体への回帰】が可能になるのである。

母親はまさかわが子が、と子どもの不登校に愕然とすることに加え、周囲からの風当たりにも晒され、伴走者不在の孤独の中で追い詰められて憔悴し、他者のために奔走する事態に《調整弁としての摩擦》を感じる。一方では教員とのディスコミュニケーションなど、学校に声が届かないという経験をし、その焦燥感から大丈夫って言ってと関係者や専門家に SOS を求めて彷徨い、【弱者となって社会と出会う】。母親は藁をもつかむ思いで教育や家族の在り方、子どもの発達などの情報を集めるが、その学びはモーターとなって、わが子の不登校への理解を進め、やがてはかつて自分が負うた子に教えられるかのような境地に至る。こうした経過は《問題意識の萌芽》となり、子どもを登校させなければならないという囚われを断ち切る事に繋がり、取り繕いを手放すという従来の価値観からの変容が始まる。

価値観の変容によって【自分の課題に気づく】自己省察が進むが、その課題の一つに《親子関係の再定義》がある。それは子どもに対し、自分が産んだというへその緒の奢りとも言える過度な自負や責任感があることに気づき、あるべき母親像を手離そうと、自分の親の価値観との対決を余儀なくされる親を乗り越えるという難題である。しかしこれを乗り越えることによって、子どもも自分自身も尊重することが容易になり、他者との境界の意識化が促進される。とはいえそれは他者と

の交流を避けて孤立へ向かうものではなく、むしろ《新たな関係性に息づく》あり方を探るものである。夫と健やかなるときも病める時も人生のパートナーとして歩めるかどうかという関係性の見直しや、子どもの不登校をめぐる経験を共感を持って受け容れられる居場所の発見は、人は受容されて持続可能であるという確信となり、仲間との連帯を抛り所に、新しい幸せの形を模索していく。探り探り自分の判断や生き方を定め直していくその過程は、常に反復する「やっぱり」という価値観の揺れを伴う一進一退ではあるが、家族の出来事に埋没せず、仕事では紅を引くことで社会との接点を維持し、経験値の活性化は加速していく。こうして芽生える《回復途上の自尊心》は【他者と呼応し自らも慈しむ】という新たなバランス感覚を培い、徐々に他者の基準ではなく、自分自身の声を聴くことが日常に根付き、【人生の主体への回帰】がなされるのである。

2. 結果図

結果図では「個人としての私」「家族の中の私」「社会で生きる私」という次元を母親の立脚点で交わるバーで表し、各概念はどの次元の狭間で生じるのか、時間的にはどの段階で起きることなのかを交差性の概念²⁾を参考にして配置を定めた。バーの先端に直結する6つの独立した概念は次のカテゴリーへの動因である。この図によって【人生の主体への回帰】がなされる過程を右上のまさかわが子という概念をスタートに時計回りで表現している。

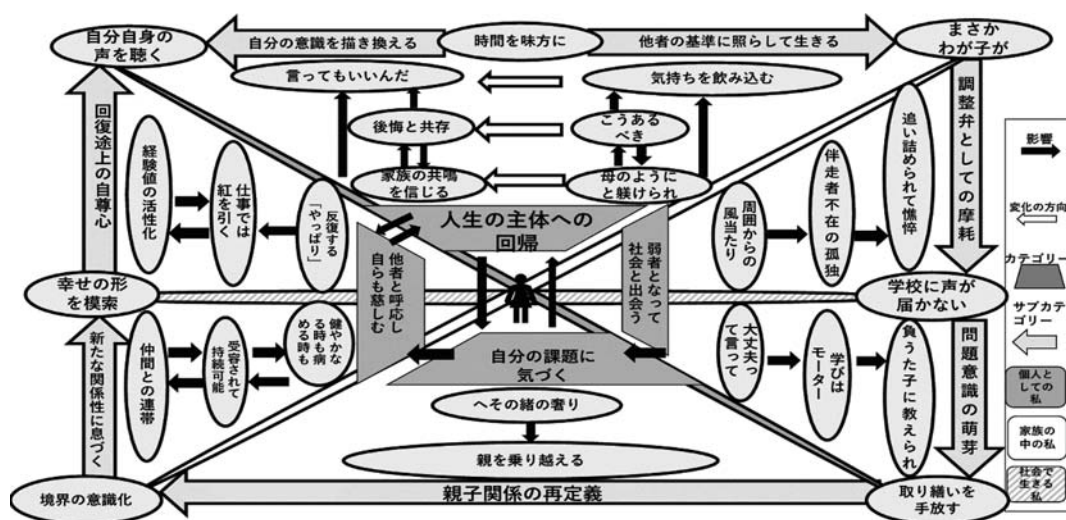


図1 不登校の子どものいる母親が自分の意識を解放するプロセスの結果図

(筆者作成)

3. 各カテゴリーの説明

(1) コアカテゴリー【人生の主体への回帰】前半

コアカテゴリー【人生の主体への回帰】は二つのサブカテゴリーと二つの独立した概念によって構成され、全体を中心となるコアカテゴリーとして位置づけた。

サブカテゴリー《他者の基準に照らして生きる》は子どもが不登校になる以前の状態を表す三つの概念で構成される。母親が自らに内在するジェンダー意識に葛藤を感じながらも、それに沿わざるを得ない社会の仕組みの中で自分を抑え込む習慣が身につけている事は「小さいときは親の価値観で、結婚してからは主人の価値観で生きるっていう母親の価値観をずっと植え付けられてきたから」(F)などのデータから母のようにと頼けられという概念で表すことができ、「私は夫より稼ぎも低いし、まあ女性だしっていうのが多分根底にあったんだと思うんですけど」(G)という表現にはその根深さがあぶりだされている。しかしこうあるべきと自らを抑圧しているうちに、自らを尊重するのではなく、自己主張をせずに気持ちを飲み込むことが常態化する。母親たちの自己実現は、「家族の中の私」という役割の中で見出

されようとはするものの、「自分の中で飲み込んできたんですけど、このままいくとまずいなって意識はあつて」(C)等のデータからは、内には秘められた葛藤のあることが見て取れる。

(2) カテゴリー【弱者となつて社会と出会う】

【弱者となつて社会と出会う】カテゴリーは、《調整弁としての摩耗》と《問題意識の萌芽》という2つのサブカテゴリーと2つの独立した概念によって構成され、不登校の子どものいる母親が自分の意識を変えるプロセスは、まさかわが子という子どもの不登校に愕然とする概念からスタートする。

サブカテゴリー《調整弁としての摩耗》に属する周囲からの風当たり、伴走者不在の孤独、追い詰められて憔悴という3つの概念は母親の混乱ぶりを象徴的に表す。母親は「学校に行かせるべき」という周囲からの風当たりを受けはじめ、自分が責められているような感覚にも陥りやすい。その思いは夫には伝わりにくい。「お前の育て方が悪いみたいに言われて」(C)、「(夫は)無理やり行かせたらなんとなかなるんじゃないかみたいなことをずっと言っていて」(A)という語りが見えるように、子どもの不登校に対する夫婦の感覚にはズレがあり、伴走者不在の孤独感が母親を苛

む。こうして追い詰められて憔悴していく状況は「どうしていいかわからない事ばかりで不安で不安でしょうがなかった」(B)、「子どもファーストは素晴らしいんですけど、私も人間なんですけど、みたいな」(A)という思いとして蓄積し《調整弁としての摩耗》は限界に近づいていく。さらにそれに追い打ちをかける様に「担任の先生に、なんとか子どもが登校した日に『学校でどうですか』って聞いたら『普通です』って、普通なわけないでしょ、って思って」(G)等と学校に声が届かないという事態が訪れるものの、学校を頼りにできないという諦めや思い切りは、むしろ母親を次の行動へと駆り立てる契機にもなる。

それを表すサブカテゴリー《問題意識の萌芽》は、大丈夫って言って、学びはモーター、負うた子に教えられという概念で説明される。母親が「どこかと繋がりがたかった。相談できる人を探したかったし、それでいいんだよと言って欲しかった。私がおかしくならないでなんとか私自身を保てる手段は母と父に毎日のように電話すること」(A)と大丈夫って言ってと、話を聴いてくれる人や、これまでの子育てを承認してくれる人を探し求めるバリエーションは全データの中で40か所と最も多くみられ、母親たちの切実なニーズを表象する。一方、自らも不登校の対応方法を探ろうとする懸命な学びはモーターとなり、母親は子どもへの理解のみならず、社会や自分自身への洞察を深めていく。「本当に息子のおかげで色々変わって、私自身が色々気づくきっかけになった」(C)等、負うた子に教えられという視点が母親に宿り始める。これらの《問題意識の萌芽》というサブカテゴリーは「普通にこだわることで生きづらいんだったら、そうじゃない生き方って何だろう」(G)と、次の行動の方向性を定めるまでの助走期間という側面も持つ。

このように【弱者となって社会と出会う】カテゴリーは母親が社会の中で周縁化される立場を味わい、価値観の変容を迫られる経験として捉えることができる。

(3) カテゴリー【自分の課題に気づく】

【自分の課題に気づく】カテゴリーは、取り繕

いを手放すという独立した一つ概念と《親子関係の再定義》というサブカテゴリーとによって構成される。

「もう自分が毎日の戦いに疲れてしまって、あ、もういいよ、休んでいいよって言ったんですね。それは子どものためではなく自分のために言った言葉で。その日のことはもう本当に鮮明に覚えてて」(E)等、子どもの不登校という選択を尊重しようとしてそれまでの取り繕いを手放すエピソードはいずれも生き活きと語られており、母親が自分らしさを取り戻していく動因と位置付けられる。

サブカテゴリー《親子関係の再定義》はへその緒の奢りと親を乗り越えるという2つの概念で構成される。【自分の課題に気づく】という大きな潮目の変化に際し、母親が向き合わざるを得ないのが《親子関係の再定義》である。母親は自分の親の「孫が学校へ行かない」という心配に理解を求めていく中で、自身にも親と同様に子どもへの執着があるという自覚を持つに至り、「今まで私がいなきゃこの子たちは路頭に迷う、ってどっかで思い込んでた。思いが強すぎた。」(E)等と自らのへその緒の奢りに気づいていく。

しかしながらこの自覚は子どもへの執着を手放し、代わりに長らく忘れていた「自分が人生の主体である」という意識を取り戻すきっかけとなる。その際、相前後して取り組まねばならないのが、親を乗り越えるという難題で、その意思表示には多大なエネルギーを要する事は、豊富なデータによって裏付けられた。「子どもに『学校に行ってる』って嘘をつかせたくなかったので3年間も親と会えなくて、いざ母に言わなきゃって時にはわざわざ旅行に行って、母と3時間ぐらいロビーで話して、もう2人ともぐったりして」(D)等、この過程は「母親として」子どもの意思を尊重する覚悟を表明するだけではなく「娘として」は何度目かの親からの自立という意味合いを含み、自身の判断を優先し、親との関係性を変えていくための通過点となる。と同時にそれは尚も「娘でもある母親個人」を受け入れて欲しいという切なる願いである事も、多くの調査対象者が親とのやり取りを涙ながらに語った様子から推察

される。この時に例え一般的な「母親規範」にそぐわずとも、個人としての存在への承認が為されると、母親は自分らしく生きていくことを自らに許していく。その煩悶は「幸せと思っていた概念から180度違う考え方に行くまでが、もう苦しくて苦しくて」(A)等の語りから解釈が可能である。従って《親子関係の再定義》は、あるべき母親像を手放して母のようにと躰けられてきた規範と距離を置き、ジェンダーをめぐる抑圧から解放に向かう重要なステップと位置付けられる。

このように【自分の課題に気づく】カテゴリーは、子どもの不登校に母親として格闘するうちに、それが自分の中に潜む課題と地続きであると気付く過程に他ならない。この過程は「子どもが死にたいって言ったんですよ。もうショックでショックで」(F)等と矢も楯もたまらぬ経験の後に訪れ、子どもを護りたい一心の背水の陣で至る境地である。しかしそれは図らずも「自身の内的な力に気づく」プロセスであり、エンパワメントの過程そのものである。

(4) カテゴリー【他者と呼応し自らも慈しむ】

【他者と呼応し自らも慈しむ】カテゴリーは《新たな関係性に息づく》《回復途上の自尊心》という二つのサブカテゴリーと境界の意識化、幸せの形を模索という二つの独立した概念から構成される。

「やっと気づいたんですよ。同じ人間じゃないって」(G)等の語りから読み取れる境界の意識化は、いずれも軽やかな口調で語られた。変化の可能性は自らの手中にあるという気づきは、サブカテゴリー《新たな関係性に息づく》への動因となっており、それらは健やかなるときも病める時も、受容されて持続可能、仲間との連帯という3つの概念で説明される。健やかなるときも病める時という概念は、当初、不登校に対する考え方の違いをめぐるズレを感じていた夫と徐々に足並みが揃い、夫婦関係は「なんか男女じゃなくて、共に戦った・・・それ以降は同志っていう気がしますね」(A)と、人生のパートナーとして協力し合う関係性に変化することを端的に表す。従ってこの健やかなるときも病める時という概念

は境界の意識化とは一見アンビバレントで、説明のつきにくいニーズではあるものの、その多様な感情が受け容れられると、母親たちは受容されて持続可能という安定した状態に至る。そしてこの関係性をなぞるかの様に同様の立場にある仲間との連帯へと世界を広げ「つながりがあるっていうことがいかに大切かって実感した」(B)等と、不登校の支援団体という安心できる環境の中で互いの経験を語り合い、仲間の中に自らの存在意義と新たな価値観を見出していく。これは【弱者となって社会と出会う】段階で生じた学校に声が届かないという孤独を示す概念の対極にあたるもので、この段階の母親たちにはエンパワメントの要素である連帯が顕著にみられる。一方で彼女たちは仲間との交流を通して自己省察を深め「周りから見てじゃなくて、自分の心が幸せかどうか」(I)と、自分の幸せの形を模索する段階へと移行していくのである。

サブカテゴリー《回復途上の自尊心》は反復する「やっぱり」、仕事では紅を引く、経験値の活性化という3つの概念によって説明をすることができる。自分の幸せを模索するに至っても、子どもについての心配は時折頭をもたげ、彼女たちは「やっぱり高卒っていうものは今の時期とっておく方が、やっぱりいきなり就職とかよりはいいだろうっていうのが・・・息子にはなかったんですけど、やっぱり私の中にはあって」(C)などと逡巡しながら自身の価値観や物事の優先順位を定め直していく。だがこの反復する「やっぱり」という概念は閉鎖的な自己省察だけではなく、子どもや夫などの変化や、新しい仲間との交互作用によって引き出されることに特徴がある。加えて仕事やボランティアを通し「社会で生きる私」としての時間を積み重ねる中で、徐々に母親は人生の主体としてのアイデンティティを取り戻していく。こうした母親の変容は「仕事に行ってる間だけが忘れられる時間。私自身になれて」(C)、「仕事って女性にとっても自己実現の一つですよ、だから仕事で評価されることもすごく重要だった」(H)、「仕事を始めて社会と触れていく中で、子どもにも色んなことをやらせてみたくなっ

て」(D) というデータから仕事では紅を引くという概念で説明される。それは「子どもを食事で支えてきたから、それを活かしたくなって」(F)、「社員研修の講師をする時『皆さん自分を大事にして、自分の好きなこと精一杯してください』って力説してます」(C) 等、子どもの不登校をめぐる体験をストレンクスとして活かす経験値の活性化へと繋がり、「なにか起きたらピンチはチャンスって思うようになった」(H) と物事の認識の仕方にも変化をもたらしていく。それが他者や環境との交互作用の中で培われ、事態を切り拓いてきたという実感は「回復途上の自尊心」を形成する重要な要素である。

このように【他者と呼応し自らも慈しむ】カテゴリーに属する概念は多くが双方向に影響し合う関係性ではあるものの、その経過は自分自身も尊重する、つまり自らの存在を慈しむことを一方で後押しし、結果として「個人としての私」に軸を移していく過程となっている。

(5) コアカテゴリー【人生の主体への回帰】後半

【人生の主体への回帰】を構成する前半のサブカテゴリー《他者の基準に照らして生きる》は既述した通りであるが、ここでは後半の自分自身の声を聴くという概念とサブカテゴリー《自分の意識を描き換える》について説明をする。

子どもが不登校という状況下で母親が自分自身を慈しむ、つまり「個人としての私」を尊重することは容易ではない。しかし、人生の主体たるためには自分自身の声を聴くことは不可避であり「自分がどうしたいのか」に正直であることは「不登校の子どもがいる母親が自分の意識を解放するプロセス」のゴールともいえる概念である。「形にこだわらず、私は私としてちゃんと自分が幸せだと思う価値観で生きたい」(C) という新たな生き様は次第に周囲にも浸透し、母親は自分の権利も主張する存在として定着していく。

これによって生まれるサブカテゴリー《自分の意識を描き換える》は【人生の主体への回帰】というコアカテゴリーの後半として位置づけられ、後悔と共存、家族の共鳴を信じる、言ってもいい

んだという三つの概念によって説明することができる。後悔と共存という概念は母親たちが子どもの不登校をきっかけとした経験を清濁を併せ呑むかの様に語ることを表象し、「良かれと思ってやってきたことが真逆で」(E)、「私が息子の人生を壊したって思ってたので、あとは死ぬまでに幸せって思ってくれたらと願ってますけど」(A) 等と切なさを胸に前を向き、子どもの成長を見守るというスタンスに退いていくことを意味している。経験から目を背けず今後に活かそうとするこの覚悟は、家族間の交互作用や自らの生き方の重要性への再認識に裏付けられている。これが母親役割に限定されない家族を思う気持ちと相まって、母親は従来の行動のパターンを打ち破っていく。それは家族の共鳴を信じるという概念で説明ができ、「私が変わることで子どもたちが変わる、子ども達が変わっていく様子を見て、主人が前ほど『上から』じゃなくなって」(C) 等、夫婦の力関係や家族のあり方に変化をもたらし、言ってもいいんだと発言へのためらいを払拭していく。それは「今まで勝手に言っちゃいけないとか、言ったらどういう風に帰ってくるとか、反応を想像して言わなかったのが、その時は迷うこともなく口から出た。それがきっかけで今、主人が洗濯するように・・・」(B) 等の多くのデータに基づく。このように声を挙げて応答が得られる達成感を示すこの概念は、まさしく前半の《他者の基準に照らして生きる》サブカテゴリーに属す気持ちを飲み込むという概念の対極と位置づけられる。

以上のように《自分の意識を描き換える》サブカテゴリーは不登校が始まる前の《他者の基準に照らして生きる》常態化からの位相の転換であり、エンパワメントの概念に照らせばまさに解放という意味合いを持つ。その過程は「時間って大切なんだあって、今は思います。ぶつかりあった時間は私にとっては良かった」(B) という語りが示す様に、時間を味方にして徐々に進んでいく。従って不登校の子どもがいる母親が意識を解放するプロセスは、時間を味方に《自分の意識を描き換える》足取りといえることができる。

4. 考察

(1) ソーシャルワークは「母親規範」をいかに捉えるのか

インタビューからは、「個人としての私」「家族の中の私」「社会で生きる私」と言う次元が交差する狭間に「母親規範」というジェンダーをめぐる生きづらさが生じていることが確認できた。とりわけ《弱者となって社会と出会う》というプロセスではそれが特徴的であることから、支援者自身のジェンダーセンシビリティが充分ではなかったり、その特権性に無自覚であるが故に、母親の声が的確に聴きとれていないという懸念が払拭しきれない。

また、母親たちの経験は母親が女性である、という共通項によって起きている可能性にも留意したい。万が一彼女たちの生きづらさや社会的不平等を訴える声が「母親規範」を大義名分としてかき消されているとしたら、規範の背景には何らかの差別的な意味合いを内包する社会構造上の課題がある事を視野に入れねばなるまい。すなわちソーシャルワーカーがエンパワメント志向でジェンダーセンシビリティを活かしているか、構造的

な抑圧に加担してしまいかと省察を深める事は、ソーシャルワークが不登校の子どものいる母親の不可視化されたニーズをいかに捉え、母親の人権を子どもの福祉との兼ね合いの中でいかに位置づけるのかと、その認識を問われている事と概ね同義であろう。

(2) FSW の視角による母親支援

インタビューでは不登校の子どものいる母親たちは仲間との語りや連帯を通し、苦しかった経験をリフレーミングし、意識を変え、エンパワメントに向かうと把握された。それは子どもに焦点を合せているだけでは介入のポイントを見いだしにくい家庭であっても、母親をケア役割を担う者としてだけではなく、人生の主体とまなざしてアセスメントをすることによって、従来とは異なる切り口の支援が拓けることを意味している。この観点から本稿では不登校の子どものいる母親への支援のあり様を FSW の視角から表 3 のように整理した。内容については母親たちが異口同音に感謝を述べた不登校支援団体による支援の特徴を加味している。

表 3 FSW の視角による不登校の子どものいる母親への支援

	支援のポイント	FSW の視角	期待される効果
①	学校を休み始めた初期への介入	母親が追い詰められて憔悴することのないよう、支援対象としても捉え、不安を軽減して自尊心を維持	家族の混乱や緊張状態を緩和し、子どもへの適切な対応が可能になる他、学校との対話や安定した関係性が継続
②	不登校は社会構造上の課題でもあるという理解の促進	関係者の不安を無自覚に母親に発散、抑圧させず母親の「大丈夫って言って」というニーズに対応	母親の社会的な視点や課題解決意欲を促進し、精神的な安定を維持
③	伴走型の相談機関や支援団体との連携	ジェンダーの課題を踏まえ、共に歩むことができる支援者や仲間との連帯	自分の課題に気づき、新たな価値観を獲得。ストレングスが発揮され、人生の経験値が向上
④	ソーシャルワーカーのジェンダーセンシビリティの内面化と母親や関係者への啓発	母親規範に囚われない受容や傾聴、母親への人生の主体としての認識	子どもの不登校という経験が母親の中に肯定的に位置づけられ、エンパワメントが促進

(筆者作成)

生成した概念からニーズを推定すると、表 3 の①②は母親が【弱者となって社会と出会う】時期のニーズに対応する支援で、③は【親子関係の

再定義】【他者と呼应し自らも慈しむ】時期への効果が期待される支援である。そして④はエンパワメントを促進する【人生の主体への回帰】の為

に欠くべからざる視点であろう。Feder-Eva-Kitty (2010=2023) はケアの倫理の観点から、依存へのニーズに携わる人をいかに社会でケアをするのか、と我々に投げかける。不登校の子どもの急増とそのケアを主として担う母親が「母親規範」というジェンダーをめぐる抑圧に晒されやすい現状に鑑みれば、ソーシャルワーカーのジェンダーセンシティビティの内面化に加え、母親や関係者への啓発も、抑圧が生ずる構造への批判的意識を養い、行動戦略を立てるソーシャルワークのグローバル定義に叶う支援といえよう。

5. 結論

リサーチクエスションに照らして結論付けると、RQ①については、「母親は学校や家庭との関係性の中で求められる役割を自らに刷り込まれているジェンダー意識に照らし合わせ、生きづらさを抱えている」、RQ②については、「母親は子どもの不登校という経験を通して自らの課題に気づいて意識を変化させ、仲間との連帯や家族との交互作用の中でストレングスを発揮し、エンパワメントが促進する」と明らかになった。

また、本研究の意義は第一に不登校の子どものいる母親支援におけるジェンダーセンシティビティの重要性を明らかにした事、第二に分析の結果図において母親を主体として捉え、「個人としての私」「家族の中の私」「社会で生きる私」という各次元の交わる狭間のニーズを可視化し、孤立しがちな家庭に新たなアプローチの可能性を見いだした事、第三に不登校の子どものいる母親への具体的な支援のあり様を FSW の視角から提示した事である。

6. 今後の課題と展望

本研究の調査協力者が全員、配偶者のいる母親であった事実は、配偶者の存在が情報収集や経験の言語化について優位に働いている可能性を示唆している。その背後にはジェンダーの文脈で課題に向きあう余裕のない、より困難な状況にある母親たちが存在することを見逃してはならない。従って、本研究の知見は直ちに一般化できるもので

はないものの、階層や属性等の違いにより「不登校の子どものいる母親」と一括りにできない多様な母親が存在することを浮き彫りにし、その声を掬い上げる必要性を提起するものである。今後は子どもが不登校となった際に意識化されるジェンダーをめぐる課題が、社会的な背景や家族形態の違いなど複合的な要因との狭間でいかに生じているのか、その視点を深化させたい。

また 2025 年に二回にわたって調査対象者に分析の結果を報告し、メンバーチェックングを依頼したところ、以下のような示唆を得た。第一に、支援者が母親の相談を受ける際に結果図を見ながら協同でアセスメントを進めれば、結果図がすぐろくのような機能を果たし、時間的経過を意識しながら母親がどの段階にあり、いかなる支援や環境が必要なのかを確認できる（支援団体内で試験的に実施中）、第二に本分析結果は不登校に限らず、親の介護や障害児を育てる際に女性が向き合うジェンダーの課題とも類似性が高いため、女性たちが課題に向き合う際の知見として活かされうる、という二点である。第一の示唆については支援団体のフィードバックを得ながら実践で活用しやすいよう修正を重ねたい。また第二の示唆については他の状況下にある女性の声にも耳を傾け、子どもが不登校のケースに限らず、女性のエンパワメント促進の一助となるようその共通要素を見出していきたい。

※本稿は 2024 年度立教大学コミュニティ福祉学研究科の修士論文の一部を大幅に変更し、2025 年の日本ソーシャルワーク学会で発表した内容を加筆修正したものである。

注

- 1) IFSW と IASSW の総会で 2014 に採択。共同日本語訳：日本ソーシャルワーク教育学校連盟 (JASWE)、日本ソーシャルワーカー連盟 (JFSW) https://jfsw.org/definition/global_definition/ (最終アクセス：2026 年 4 月 7 日)
- 2) インターセクショナリティ。交差する権力関係が、社会にまたがる社会的関係や個人の日常生活にどのような影響を及ぼすかを検討する概念 (Collins-Hill

Patricia 2019=2014)で、差別の複層性、交差性を可視化しやすい(藤高和輝:2020)。

引用・参考データ

文部科学省(2025)『令和6年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査』https://www.mext.go.jp/content/20251029-mxt_jidou02-10002753_1_4.pdf (最終アクセス:2026年4月7日)

文部科学省(2022)『生徒指導提要 令和4年12月』https://www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf (最終アクセス:2026年4月7日)

引用文献・参考文献

Collins-Hill Patricia (2019) *Intersectionality as Critical Social Theory*, Duke University Press (=2024, 湯川弥生・松坂裕晃・佐原彩子・藤浪 海訳『インターセクショナリティの批判的社会理論』勁草書房。)

Dominelli-Lena (2002) *Feminist Social Work Theory and Practice*, Palgrave Macmillan (=2015, 須藤八千代訳『フェミニストソーシャルワーカー福祉国家・グローバリゼーション・脱専門職主義』明石書店。)

藤高和輝(2020)「インターセクショナル・フェミニズムから／へ」『現代思想 3月臨時増刊号 総特集 フェミニズムの現在』vol48(4), 青土社, 34-47.

石崎和美・朴木佳緒留(2014)「母子生活支援施設における母親のエンパワメントプログラムの開発」神戸大学大学院人間発達環境学研究科『研究紀要』7(2), 191-201.

市川由香里(2018)「重症児の家族支援の実態——家族をエンパワメントするネットワークづくりと相談支援——」『日本重症心身障害学会誌』43(1), 49-50.

加藤美帆(2009)「『不登校』からの家族秩序への問い直し—母親へのインタビューから」『ジェンダー研究』12, 93-105.

加藤美帆(2012)『不登校のポリティクス 社会統制と国家・学校・家族』, 勁草書房.

木下康仁(2020)『定本 M-GTA - 実践の理論化をめざす質的研究方法論』, 医学書院.

Feder Eva Kitty (1999) *Lover's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*, Routledge (=2023, 岡野八代・牟田和恵監訳『愛の労働あるいは依存とケアの正義論(新装版)』白澤社。)

工藤浩二(2023)「子どもの不登校に伴う母親の変化のプロセスの検討」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』74, 87-9.

Lee Judith A. B. and Hudson Ronda. (2017) *Empowerment Approach to Social Work Treatment, Social Work Treatment, Interlocking Theoretical Approaches Sixth Edition* edited by Francis J. Turner, Oxford University Press (=2023, 北島英治監訳 上田洋介訳「ソーシャルワークトリートメントへのエンパワメント・アプローチ」『ソーシャルワーク・トリートメント』第6版, 中央法規, 167-196.)

Milliken-Eveline (2017) *Feminist Theory and Social Work Practice, Social Work Treatment, Interlocking Theoretical Approaches, Sixth Edition* edited by Francis J. Turner, Oxford University Press (=2023, 北島英治監訳 上田洋介訳「フェミニスト理論とソーシャルワーク・プラクティス」『ソーシャルワーク・トリートメント』第6版, 中央法規, 227-49.)

水谷千景(2024)「不登校児の母親の当事者研究——『女性』としての困難に着目して——」『女性学年報』45, 3-25.

文部省(1992)学校不適応対策調査研究協力者会議『登校拒否(不登校)問題について——児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して——』.

森田ゆり(2007)『ドメスティック・バイオレンス 愛が暴力に変わるとき』小学館文庫.

中原洋子(2016)「支援が必要な母親への妊娠中からの保健師の支援」『日本地域看護学会誌』, 19(3), 70-78.

沖津奈緒(2025)「不登校経験のある子どもの母親の成長体験——混合研究デザインを用いて——」東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科 学校教育学専攻健康・スポーツ系教育講座 博士論文, 95.

大久保義美・肥田幸子編著(2006)『不登校を母親の視点から考える 親と子の意識調査から見てきたもの』, 唯学書房.

天童睦子(2020)『女性のエンパワメントと教育の未来——知識をジェンダーで問い直す』, 東信堂.

内海由美子・澤恩嬉(2013)「外国人の母親に対する読み書き能力支援としてのエンパワメント〜幼稚園・保育園と連携した主体的子育てを目指して〜」『日本語教育』155, 51-65.

上田明美・石橋照子・吉川洋子(2020)「精神疾患を有

- する母親の育児体験の意味」『日本看護研究学会雑誌』43(1), 51-62.
- 湯澤直美 (2017) 「子どもの貧困対策の行方と家族主義の克服」松本伊知郎・藤原千沙・阿部彩ほか編『「子どもの貧困」を問い直す 家族ジェンダーの視点から』法律文化社, 11-34.
- 横山登志子 (2020) 「語られていない構造とは何か——ソーシャルワークと『ジェンダーセンシティブ』」『ジェンダーからソーシャルワークを問う』ヘウレーカ, 21-32.
- 横山登志子 (2024) 「ソーシャルワーク」ジェンダー事典編集委員会編『ジェンダー事典』丸善, 313.

The Process of Empowerment in Mothers of Children Who Exhibit School Refusal and Its Support Model:

Focusing on Gender Issues That Tend to Be Overlooked

OGURA Akiko

(RIKKYO UNIVERSITY, College of Community and Human Services)

Keywords: School Refusal, Motherhood Norms, Gender, Feminist Social Work, M-GTA

In the 2024 academic year, the number of students who exhibited school refusal exceeded 350,000, and addressing this has become a widely recognized urgent social issue. However, the tendency for the mothers of these students to be susceptible to gender-based oppression, by way of prevailing “Motherhood Norms,” tends to remain unrecognized. This paper analyzes the results of an interview survey of mothers with children who exhibit school refusal, specifically addressing the challenges faced in their relationships with family and school, using the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA). It clarifies the process through which these

mothers move toward empowerment, and attempts to present a model for supporting these mothers from the feminist social work perspective.

The findings reveal that these mothers have needs that are difficult to recognize, but exist in the gaps between the distinct dimensions of the “Self as an Individual,” “Self in the Family,” and “Self Living in Society.” Furthermore, this study finds that these gaps also serve as a source of energy and concludes that through support delivered with gender sensitivity, mothers move toward empowerment.